

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第152号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成20年6月21日

ク イ ナ



2007.07.15 札幌市東区モエレ公園

撮影者 吉中 宏太郎（札幌市中央区）



も く じ

札幌市豊平区でホシムクドリ キバシリのねぐら	広 報 部	2
森林総合研究所北海道支所 [閑話] 野鳥あれこれ 「野鳥と詩吟」	松岡 茂	3
幌加内町のダケカンバ林における暖候期の鳥類相	札幌市西区 中正 弘子	6
平成20年度総会報告	札幌市東区 山田 雅仁	7
探鳥会ほうこく		11
探鳥会あんない		15
探鳥幹事・佐藤幸典さんを悼む		
鳥民だより	札幌市白石区 山田 良造	16
		16

札幌市豊平区でホシムクドリ

広 報 部

ホシムクドリは自然分布や移入などにより、アジア中西部からヨーロッパにかけて、また、北アメリカ、南アフリカ、オーストラリアなどでは普通に見られるということですが、日本では数少ない冬鳥として珍しい鳥の一つです。そのホシムクドリの写真と以下の観察記録が会員の品川睦生さん（札幌市南区）から寄せられましたので紹介します。

観察・写真撮影は2008年2月15日、午前11時過ぎで、場所は札幌市豊平区西岡の西岡八幡宮境内です。水源地通りの札幌大学の斜め向かいになります。

水源地通りで毎冬よく見られるレンジャク類などを目当てに、境内の駐車場に車を止めて鳥を探していたところ、庭木の松の陰に見慣れない鳥がいるのを見つけました。ちょっと待っていたら良く見える場所に出てきました。一緒にいた5羽ほどのムクドリとほぼ同じか、少し小さい感じで、全体が黒っぽく、白い斑点がほぼ身体中に散らばっていました。

デジカメで撮り、自宅パソコンでモニターいっぱいに表示して図鑑と比べ、ホシムクドリという確信を持ちました。でも、図鑑には九州南部や沖縄で見られる数少ない冬鳥と記載されているので、念のため写真を他の人にも見てもらい、改めて確認を得ました。

後日3回ほど同所周辺に行ったのですが、ムクドリはいてもホシムクドリは見られませんでした。

北海道鳥類目録改訂2版（藤巻裕蔵 2000）には、北海道での記録として、1987年3月28～29日に利尻島、1992年4月4日に稚内、1994年3月に滝川、1994年10月29日に網走、1999年12月17日に札幌市中の島の5例が記載されています。2000年以降については、昨年（2007年）の愛護会宿泊探鳥会で5月4日に焼尻島で観察されており、今回の記録が北海道では7例目になるとみなされます。

北海道でのホシムクドリの記録詳細全部を確認したわけではありませんが、ほとんどはムクドリの群れに入って単独で観察されているようです。電線などにずらりと並ぶムクドリの中に、ひよっとしたらホシムクドリがいるかもしれません。今度の冬には注意して見てみましょう。



ホシムクドリ 2008.2.15 札幌市豊平区

キバシリのねぐら

森林総合研究所北海道支所 松岡 茂

鳥の“ねぐら”（寝る場所）を観察したことはありますか。札幌であれば、カラスやムクドリやねぐらを見たことがある方は多いかもしれません。あるいは、公園や庭の針葉樹にヒヨドリやレンジャクが夜間入っていたかもしれません。森林の鳥については、どうでしょうか。フクロウのねぐらは、昼間に観察できることもあって比較的多くの方がみているのではないのでしょうか。では、カラ類やキツキ類のねぐらはどうでしょうか。さらに、キバシリは？

私の今の研究内容は、自分で樹洞を掘ることができないけれど樹洞を利用する動物たちとキツキ類のあけた穴の関わりを明らかにすることです。木材生産の場としての森林から、多様な公益的機能を発揮する場としての森林に近年目が向けられるようになってきました。治山治水、森林浴、最近では二酸化炭素保持源としての機能も重視されています。そして、多様な生物を育む場としての機能も重要です。森林にすむ動物の種類数や個体数が変化する条件を探る、それが研究の主たるテーマです。多くの動物群について研究が進められていますが、私の場合、樹洞利用動物を中心にこのテーマに取り組んでいます。

樹洞を利用する動物たちの関係が比較的鮮明に見られるのは、繁殖期です。なんとしても子孫を残そうと、樹洞利用動物は繁殖に適した樹洞を探しますが、森林の中に樹洞はあり余ってはいません。いわば住宅難です。自分で穴を掘るキツキ類はよいとしても、自分で穴を掘らない動物にとっては、キツキ類の穴も貴重な“住宅”になりえます。そして、樹洞をめぐる争いもおきます。繁殖期の調査はどうしても欠かすことができません。一方で、樹洞利用動物の多くは、その森林に一年中とどまっています。そして、樹洞で繁殖するカラ類やキツキ類などの留鳥は、冬も樹洞を利用します。もちろん、繁殖のためではなく、ねぐらとしての利用です。冬も樹洞をめぐる軋轢が鳥たちの間に生じているかもしれません。そうすると、冬のねぐら調査も必要になってきます。

ねぐら入り行動

鳥たちがねぐらに入るのは、日没の前後です。しかし、すべての鳥が同じ時刻にねぐらに入るわけではありません。早寝の鳥もいれば、“宵っ張り”の鳥もいます。だいたい、キツキ類は早くねぐらに入り、カラ類がそれに続きます。コゲラはキツキの中でも早寝です。カラ類の中ではシジュウカラやヤマガラは比較的遅くにねぐらに入ります。ただ、個体差も結構あります。カラ類もねぐら入りし、さて帰ろ

うかというときに、コゲラが声も出さずに飛来し、ねぐらに入ったのを見たこともあります。早寝の個体は、ほとんど常に早くねぐらに入り、遅寝の個体はいつも遅くねぐらに入る傾向があります。うまく餌をとれない個体が、餌を求めて遅くまで動きまわっているために常に遅くねぐらに入るのででしょうか、それとも別の要因が働いているのでしょうか。

さて、本題のキバシリはいつねぐらに入るのででしょうか。キバシリは、たいていカラ類よりも遅くねぐらに入ります。かなり暗くなってからねぐらに入ることや、目立たない体色とあの隠密行動、それに位置を特定しにくい高い声が、ねぐらの発見を困難にしています。そのため、彼らを追跡してもいつも途中で見失い、長い間ねぐらを見つけることができないでいました。いつしか、キバシリのねぐらを見つけることをあきらめ、ねぐら調査の対象からもはずすようになっていました。

キバシリのねぐら発見

ところが、2006年2月に偶然キバシリのねぐらを見出す機会に恵まれました。札幌市羊が丘の落葉広葉樹林でその日もカラ類のねぐらを探していました。おおかたの鳥がねぐらに入り、遅くに入る個体がいまいかと待っていたところ、キバシリの声がかげこえてきました。私の間近の木に止まった後、通りすぎていきましたが、当然それを追いかけてみようという気はおきませんでした。しかし、他の鳥の声も聞こえないので、キバシリの声のする方向を目で追いました。例のごとく、声はすれども姿の確認はできません。ところが、30mほど離れたところに立っていたシラカバの白い樹皮をバックに黒い影がちらっと動くのが見えました。ほんとうに一瞬のことでした。何かと思い双眼鏡で樹皮を見ましたがとくに変わったところはありません。少し上に視野を移し、樹皮がはがれているところを見ると、茶色の木材の表面に木材とは違うぼんやりとした茶色のかたまりがあります。樹皮がはがれたあとに生えたキノコかなにかだろうかと思いましたが、双眼鏡の振動防止装置のスイッチを押してみるとどうも鳥のようです(図1)。背中の色からすると、キバシリのようです。頭を上にしてただ幹に止まっているようにしか見えません。そういえば、シラカバのところでなにかが動いたときから、キバシリの声は途絶えていました。その鳥は、まったく動く気配を見せません。しょっちゅう動き回って採食しているキバシリの昼の姿からは想像できないことです。これがキバシリのねぐら

でしょうか。でも、体は外から丸見えですし、本当にこれで一晩過ごすのだろうかという疑問がわいてきます。双眼鏡を使ってもほとんど見えなくなるまで待っていましたが、その鳥はそこを動きません。間違いなくそれがキバシリのねぐらであると確信し、その場を離れました。長年果たせなかったキバシリのねぐらを見つけたことで、自然とうれしさがこみ上げてきます。双眼鏡をぶら下げ、雪明かりだけの薄暗がりの中をニコニコ顔でスキーを滑らす耳順に手が届こうかという男の姿を、もし誰かが見たとしたらどのように映ったことでしょうか。

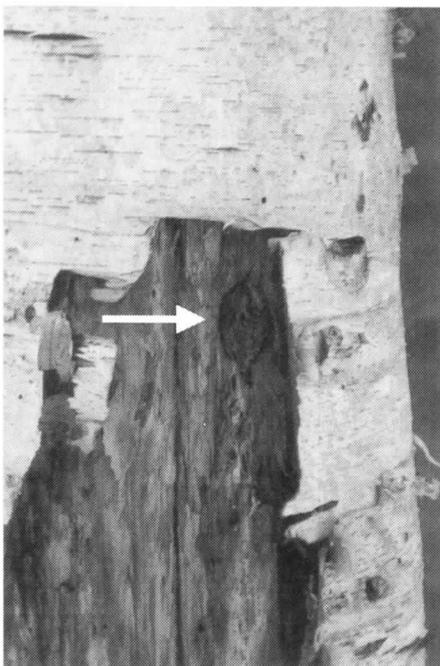


図1 シラカバにあるキバシリのねぐら。矢印のところはキバシリがねぐらをとっている(写真には、輪郭強調などの画像処理を加えています。他の写真も同様です)

キバシリのねぐら

キツキ類やゴジュウカラ、カラ類は、ほとんどの場合キツキ類が掘った穴や自然にできた樹洞をねぐらとして利用します。ハシブトガラは、まれにキツキ類の採食あとの穴に入り、尾だけを穴の外に出して寝ることがありますし、つたがからまったような場所でねぐらをとることがあります。体の一部が樹洞から見えたりすることもあります(図2)、頭はしっかりと樹洞の中に入れていることがほとんどです。私は、キバシリもそのような場所でねぐらをとるのだろうと思い込んでいました。しかし、キバシリの冬のねぐらについてはヨーロッパで比較的良好に調べられていることがわかりました。彼らのねぐらは、樹洞、木のくぼみや割れ目、浮き上がった樹皮の下、つたと幹の間の空間など多様です。最初に見つけたねぐらは、木のくぼみでのねぐらに相当します。

もちろん翌日もキバシリのねぐらを確認しにいきました。



図2 お腹をみせてねぐらにつくハシブトガラ。左上は入っていない状態

毎日ねぐら場所を変えるのでなければ、今日も前日と同じ場所に入るはずですが、キバシリがねぐらとしていた場所は、樹皮がはがれた幹にできた縦長の半球状のくぼみでした。縦横約5 cm、4 cm、深さ4 cmです。ここにちょうどお腹の部分がすっぽり入る形でねぐらをとっていたようです。文献ではやわらかい木材をつついて自分でくぼみをつくるとも書かれていましたが、そのくぼみがどのようにしてできたのかはわかりませんでした。前日より少し遅い時間にキバシリは再び同じねぐらに入りました。

11月下旬から3月下旬まで続く冬のねぐら調査シーズンの途中でしたが、後半はキバシリを中心とした調査に急遽変更することにしました。理由は、キバシリのねぐらをさらにみたいというのもありましたが、他の樹洞を利用する鳥たちとのかかわりで多様なねぐら場所を確認したいということがありました。また、日本ではキバシリのねぐらの記録がまったく無いことから、記載しておく必要性も感じました。

その後36日間キバシリを追跡し、全部で5つのねぐらを発見することができました。今まで追いかけても途中で見失っていたものが、一つ見つけたことで、なんとなくキバシリの行動イメージを描くことができるようになったせいかもしれません。5つと少ない発見数ですが、私には大きな収穫です。

しかし、期待していた多様なねぐら場所の利用はみられず、すべて幹にできたくぼみを利用するタイプのものでした(図3、4)。2006-07、2007-08年のねぐら調査では、キバシリをとくに追いかけたわけではありませんが、計3つのねぐらを見つけ、それらもすべて幹にできたくぼみを利用するタイプでした。多様な場所をねぐらとするにしても、くぼみを利用するのが羊ヶ丘そしておそらく北海道における典型的なねぐら場所のように思われました。

キバシリのねぐら入り行動

ねぐら木の近くに私がいるときは、キバシリはすぐにはねぐら木に飛んでいくとは限りません。しかし、離れてみていれば、ねぐらの近くの木に止まったキバシリは、ねぐらの下30-50cmのところにとまり、そこからよじ登って躊躇すること無く穴にすっと入り、動かなくなります。私が最初に見つけたときの黒い影は、シラカバの樹皮にとまり、樹皮のはがれたところにあるねぐらに移動する一瞬だったのです。

羊ヶ丘のすべてのねぐらには、キバシリは1羽で入っていました。しかし、ヨーロッパの例では、複数個体が同じねぐらに入っているのが観察されています。頭を寄せ合わせ、同心円状になってねぐらをとることがあるそうです。また、鳥のねぐらを主題とした著作“Bird Asleep (Skutch著、邦題：鳥はどこで眠るのか)”には、多数のキバシリがかたまつてねぐらをとっているイラストがでています。このような光景をみてみたいものですが、私の調査地に生息するキバシリの密度は低く、また観察している限りでは縄張り防衛意識がきわめて強いようで、とてもこれだけの数のキバシリが1ヶ所に集まるとは思えません。ただ、春に巣立ち後の雛が早朝に1ヶ所にかたまつていて、親から給餌を受けているのを見たことがあります。

何羽かのキバシリに脚輪をつけたところ、同じ個体は同じねぐらを利用していることがわかりました。ただ、ときどきかなり遅くにねぐらをのぞいても入っていないときがあり、おそらく別のねぐらを利用していたのだろうと思われました。また、ある時期まったく利用しなくなり、その後再び前のねぐらを利用して利用するようになったこともあります。

また、ねぐら穴の下にはふんがこびりついていました。いつ排泄するのかわかりませんが、ねぐら入りの前にふんをしているのがよく観察されますし、また暗くなるまで見ている限りではふんをすることはなかったので、少なくともねぐらに入ってすぐの時間帯ではないようです。

キバシリの寝姿

私たちが鳥の寝姿をみるのはおもに水鳥でしょう。ガン、カモ、シギ、カモメなどが頭を背中側にまわし目を閉じている光景はよく目にします。いっぽうで、フクロウ類は体を立てて止まり、頭はそのままで目をつぶっています。キバシリはどうかというと、くちばしを上に向けたままの姿勢でいます(図1、3、4)。暗くなって双眼鏡でも見えなくなる時点でもこの姿勢を崩しませんでした。ところが、ものの本によると、これは寝る前の警戒している姿勢で、キバシリも頭を後ろに回し肩羽に頭をうずめて寝るとあります。たしかに、2、30mの距離から、大きなレンズが自分に向けられているのですから、安心して寝ることはできないかもしれません。外から彼らの姿が丸見えということ

は、彼らからも外敵が丸見えということです。写真を精査すると、彼らの目はしっかり開いていることがわかります。夜中にナイトビジョンでも持ち込まない限り彼らの真の寝姿をみることはできないかもしれません。ただ、比較的深い穴、おそらくアカゲラがあけた穴に入っていたキバシリは入った瞬間から頭を後ろに向けていました。他のキバシリがほぼ垂直にとまっているのに対し、この個体は頭を穴に入れていたため水平に近い姿勢でした。ただ、奥行きが足りないため、頭を後ろに回さざるを得なかったのかもしれない。

キバシリのねぐらの不思議

キバシリの寝姿をみて、不思議に思うことが二つあります。一つは外敵に襲われないのかということです。樹洞に入らないエナガやヒヨドリでも、つたが密に絡まったような場所や針葉樹に入り、外から丸見えという状況のねぐらには入りません。キバシリの茶色を基調とする背中色彩と輪郭がはっきりしない模様が、捕食者による視覚的発見を困難にしている理由の一つであることは間違いのないと思います。とくに、色覚情報が得にくい暗所ではその効果がいっそう際立つのかもしれません。ねぐらでじっとして動かずにいる限りは、フクロウ類にも見つからず、攻撃される可能性も低いでしょう。また、夕方遅くにねぐらに入るという行動も、この色彩の効果を高めることと関係しているかもしれません。このような場所でねぐらをとってなおかつ種が存続している事実が、捕食者に発見されにくいことの名よりの証拠となっています。

もう一つ不思議は、きびしい冬の気象条件を緩和するような場所でなぜねぐらをとらないのかということです。外敵に丸見えの状況は、気象環境の影響も直接受けるとい



図3 キバシリのねぐら(エゾヤマザクラ)



図4 キバシリのねぐら（ミズナラ）

うことです。羊ヶ丘でも、日最低気温がセ氏-20度以下になることがあります。強風や吹雪のときもあります。体積あたりの表面積が相対的に大きい小鳥は、大型の鳥に比べて体積あたりの熱損失が大きいはずですが、樹洞に入れば、風を多少とも防ぐことはできますし、また樹洞内の温度は、外気温に比べて変動が少なくかつ時間的に遅れます。つまり、樹洞内の最低温度は外の最低気温よりも高く、またもし早朝に外気温の最低が記録されるとすれば、それから何時間か後に樹洞内の温度は最低を記録します。しかし、その時分には鳥はすでに起きだしていますから、樹洞内の最低温度を経験することはありません。コガラでは、夜間の外気温が-30度のときに、体温を42度から34度まで下げることが知られています。体温を下げて代謝量を減らし、エ

ネルギーの損失を防ぐ工夫です。キバシリでも同様のことが起こっているかもしれませんが、もしそうであったとしてもエネルギーの損失をより少なくできるねぐらを選ぶことはできるはずですが、それをしない理由がきつとあるのでしょうが、想像の域をでません。

昼に活動する鳥たちは、ほぼ日の入りから日の出までの時間を、ねぐらで過ごします。ねぐらに入っている時間は、季節によって大きく変わりますが、一日のうちのかかなりの時間をねぐらで過ごすことになります。3月の初めに、コゲラが17時頃にねぐらに入り、翌朝6時半すぎに出るのを観察したことがあります。半日以上もねぐらで過ごしたことになります。寒さをしのぎ、捕食者から逃れて、無事翌朝を迎えられるかどうかは、彼らを選ぶねぐら場所に依存します。ねぐら場所の選択が個体の生存に大きく関わるとい意味で、ねぐらも重要な研究項目の一つになります。カラスやムクドリなどの集団ねぐらは、比較的よく研究されていますが、森林性の小鳥類のねぐらについての研究は、日本ではほとんどありません。これから安眠に入ろうというときにうさん臭い男が周辺をうろつきまわるのは、小鳥たちにとっては迷惑な話ですが、もう少しねぐらの調査を続けたいと思います。

なお、キバシリのねぐらのカラー写真は、すでに発表済みの論文に載せています。森林総合研究所のホームページ (<http://ss.ffpri.affrc.go.jp/labs/kanko/paper.html>) からPDFファイルがダウンロード可能です。

Winter roosting sites and roosting behavior of tree creepers (*Certhia familiaris*) in Hokkaido. 2007. 森林総合研究所研究報告 第6巻1号(通巻402号): 65-69.

【閑話】 野鳥あれこれ 「野鳥と詩吟」

札幌市西区 中正弘子

私の趣味の一つに詩吟があります。詩吟と野鳥とは関係がないようですが、詩吟を通して野鳥への接し方が少々変わってきたのかな……と思います。

詩吟は詩に込められた作者の喜びや楽しみを声で詩意を表すと思います。

「帰雁」 銭起 (作者) 瀟湘何事等閑回とあります。雁よお前たちはどうしてこの地を見捨て北の国へ帰って行ってしまうのか、それは川の女神の美しい調べがあまりに悲しげなのに堪えかねて飛び立っていくのだろう……とあります。雁の渡りを観ていると、この詩が浮かび、雁に一層の愛着を覚えます。

西行法師の和歌「こころなき」

心なき 身にもあはれは しられけり

しぎたつさはの 秋の夕暮れ

若くして武士から出家し世俗を捨てた西行が、秋夕を背景に、しぎの飛び立つ様子に、この時西行の観たしぎは……ハマシギかエリマキシギか……等々、想像するだけでも楽しくなります。

一つの趣味が他の趣味にも影響を与えて、より幅が広く楽しめると思います。色んな趣味を持つことにより、野鳥観察もより楽しくなるのではと思われます。

幌加内町のダケカンバ林における暖候期の鳥類相

札幌市東区 山田 雅 仁 (現住所 千葉県銚子市)

はじめに

北海道の森林面積は、総面積に対して71%と大きな割合である(北海道水産林務部のホームページより)。しかし日常生活の中で、森林に定期的に足を運ぶというのは意外に難しく、それができれば好条件に恵まれているといえるかもしれない。今回は、北海道幌加内町のダケカンバ林に行く機会が得られたので、そのときの鳥類観察記録を報告する。

ダケカンバは、主として日本をはじめ、極東ロシア、中国を含むオホーツク海に近い山地に生育する樹種である(沖津ほか1988)。ダケカンバは、陽樹で生育が早いことが知られている。また北海道では高山に見られるハイマツ帯より標高の低い位置にダケカンバ帯として生育することが多い。

今回観察した場所は、幌加内町母子里の北海道大学雨龍研究林内にあり、母子里と名寄を結ぶ名母トンネルの上部の南北に連なる尾根付近(標高590m)である。これは前回報告した母子里(山田2007)から東に向かって約5km離れた場所にある。地形的には、西側が緩やかな斜面で、東側が急斜面となっている。観察地点は、1974年に択伐後地表面を掻き起こして、自然に成長したダケカンバの二次林である。高木層の樹種は、およそ90%がダケカンバで、その他に亜高木層としてナナカマド、キハダ、アズキナシが生育している。その林床は、高さ2mを超えるチシマザサでほぼ覆われている。この周辺も同様な景観が広がっている。現地までは、林道を通して、自動車で行くことができる。また現地は、ほとんど人工的な音が聞こえない場所でもある。

この辺りの積雪期間は、11月上旬頃から5月下旬まで



ダケカンバ林の林冠の景観

であり、およそ半年間にも及ぶ。ダケカンバの展葉期間も6月上旬頃から10月下旬頃までと生育期間が短い。

ここでは2005-07年の5月下旬から10月下旬までに、観察できた野鳥種を旬別にまとめ、その記録を報告する。但し、他の仕事の最中に気がついた野鳥種を記録したもので、見逃したものがあるかもしれないので、ご了承ください。

観察できた野鳥種

野鳥観察は、双眼鏡による目視及び鳴き声によって野鳥種を確認した。5月下旬から8月中旬頃までは、晴天日も多く、風も強くないため比較的観察しやすい。8月下旬以降になると強風や降雨となる日が増加して、観察しにくい日がたびたびあった。



ダケカンバ林の林床の景観

観察期間中に確認できた種数は38種であった(表1)。そのうちスズメ目は28種(74%)を占めた。これは農耕地である母子里の72%(山田2007)、都市孤立林である北大構内73%(山田2002)とほぼ同程度で、湿原であるサロベツ原野の50%(山田2003)よりは多かった。当地で最もよく観察できたのは、ウグイスとヒガラであった。ウグイスは林床に生育するチシマザサが良い生息環境であったと思われる。またヒガラは図鑑には針葉樹林で見られると記載されている。しかし当地は広葉樹林であるにもかかわらず、ダケカンバの林冠で観察期間を通して確認できた。またアオジ、アカゲラ、ウソ、コゲラもほぼ観察期間を通して確認できた。ヤマシギはたいてい日没後に出現し、上空を鳴きながら飛ぶことで確認できた。しかし昼間にはいるのかわからない場合が多い。クマゲラは、2005年8

月上旬に一度目視観察したが、それ以外はドラミングが聞こえたことによって判断したものである。ミソサザイは5月から7月にかけて、大きなさえずりの声が聞こえたが、一度も目視観測ができなかった。5月下旬から8月上旬まで期間中だけ、ほぼ継続して観察できた種は、ツツドリ、ミソサザイ、コルリ、アカハラ、マミジロ、センダイムシクイ、キビタキ、クロジである。これらはみな特徴的なさえずりをする種である。これらがいなくなる8月中・下旬以降は、たいへん静かになる。一方8月上旬以降に比較的良好観察できた種は、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ベニマシコ、シメ、カケスなどで、これらは特徴的なさえずりをもたない種が多かった。

最も多く観察できた時期は5月下旬の28種であった。6

月中旬前後に観察できた種が一時的に低下した。その原因のひとつとしてエゾハルゼミがにぎやかに鳴いていたので、鳴き声を確認しづらかったためである。また8月中旬頃と10月中旬頃には、やや確認種数が増加した。個体数のカウントは取っていないが、全種類を統合した個体数は、5月下旬から10月下旬にかけてほぼ単調に減少しているのではないかと思われた。また8月中旬以降は、カラ類の混群が確認できた場合には種数が多く、そうでない場合には種数が少ない傾向があった。そのため8月中旬以降の種数については、偶然性が含まれている可能性も考えられる。

北海道レッドデータブック2001に記載されている種で、当地で観察された種はクマゲラ（絶滅危急種）、エゾライチョウ（希少種）の2種であった。

表1 北海道幌加内町母子里のダケカンバ林における野鳥観察記録（2005—07年）

月 旬	5			6			7			8			9			10			11			備 考
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
ヤマシギ			●	●			●	●		●	●		●	●								
トビ			●	●		●	●	●	●		●		●				●					
エゾライチョウ						●	●	●	●				●			●	●					
キジバト			●	●	●	●	●	●	●	●	●						●					
アオバト							●			●												
ツツドリ			●	●	●	●	●	●	●													
ヤマゲラ			●	●																		
クマゲラ			●	●	●			●		●	●											
アカゲラ			●	●	●	●	●		●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
コゲラ			●	●		●	●			●							●		●	●	●	
ヒヨドリ			●			●																
ミソサザイ			●	●	●	●	●	●														
コルリ			●	●	●	●	●	●	●				●									
アカハラ			●	●		●	●	●	●	●												
マミジロ			●	●	●	●	●															
ツグミ																	●	●	●	●		
ウグイス			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				
センダイムシクイ			●	●	●	●	●			●												
キビタキ			●	●	●	●	●	●														
コサメビタキ										●	●											
エナガ										●		●								●		
ハシブトガラ			●							●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
ヒガラ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
シジュウカラ			●				●			●	●		●	●								
ゴジュウカラ			●				●			●		●	●			●	●	●	●	●		
キバシリ										●												2005.8.16
アオジ			●	●	●	●	●		●	●			●	●	●	●						
クロジ			●	●	●	●	●	●		●												
アトリ																		●				2007.10.11
カワラヒワ			●		●	●			●	●									●			
マヒワ																		●				
イスカ				●																		2006.6.1
ベニマシコ			●							●	●	●			●	●	●					
ウソ			●			●	●	●	●	●	●	●	●		●		●	●	●	●		
イカル			●															●				
シメ									●								●	●				
カケス			●									●		●			●	●	●			
ハシブトガラス							●									●	●	●	●	●		
合計種数			27	18	14	20	22	14	13	13	19	8	15	8	6	11	19	13	6			

ダケカンバ林と農耕地との比較

このダケカンバ林と、前回報告した幌加内町母子里（農耕地）において観察された種を比較してみると26種が共通して見られた。そのうち76%がスズメ目であった。ダケカンバ林で確認されたが農耕地で確認できなかった種として、ヤマシギ、エゾライチョウ、ミソサザイ、コルリ、マミジロ、クロジなど林床を利用する種が目立った。一方ダケカンバ林で確認されなかったが、農耕地で確認された種は、草原性の種が多かった。これらの2地点は、互いに5kmしか離れていないため、共通して確認できた種が多かったが、環境の違いによって、どちらかの地点だけで確認できた種も少なくなかった。

また観察期間中1度だけしか確認できなかった種はダケカンバ林で8%であったが、幌加内町母子里（農耕地）では、28%と大きな違いが出た。一方複数回観察した種は、ダケカンバ林で35種、幌加内町母子里（農耕地）で38種と差が小さくなった。観察年数が違うため一概には言えないと思うが、とても面白いと思った。

むすび

今回は、森林の野鳥観察をする機会に恵まれて、とても幸運だったと思います。これまでに主として陸域に生息する野鳥（森林、農耕地、湿原、都市孤立林）を見てきました。現在は千葉県銚子市に引越し、利根川下流の河川に面した小さな草原、森林・水面・畑に近い住宅地で野鳥観察をしています。これからも気楽に野鳥観察をしていきたいと思っています。

引用文献

- 沖津進、小島覚、伊藤浩司（1988）ダケカンバ帯、p168-199. 伊藤浩司（編）、北海道の植生、北海道大学図書刊行会、pp378.
- 山田雅仁（2002）北海道大学構内の野鳥四季. 北海道野鳥だより. 130: 8-10.
- 山田雅仁（2003）サロベツ原野の繁殖期の鳥類相. 北海道野鳥だより. 131: 4-7.
- 山田雅仁（2007）幌加内町母子里における暖候期の鳥類相. 北海道野鳥だより. 148: 8-10.

平成20年度 総 会 報 告

日 時：平成20年4月11日(金) 午後6時30分～7時50分

場 所：かでの2・7 320会議室

小堀焯治会長の挨拶のあと、議長に白澤昌彦氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成19年度事業報告

〔総 務〕

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間：平成19年5月8日(火)～5月27日(日)

出 典：14名、23点

(2) 「野鳥だより」の発送（148号～151号）

(3) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催

講 師：小堀焯治氏「インド探鳥旅行」

平成20年1月12日(土)

札幌市男女共同参画センター 4階大研修室

参 加 者：63名（野鳥写真提供者6名）

(4) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売（70部）

(5) 定例幹事会の開催（各月1回、計12回）

(6) 傷害保険の更新

〔広 報〕

(1) 「北海道野鳥だより」148号～151号の発行

(2) ホームページの維持・運営

〔探 鳥〕

(1) 探鳥会27回（1回平均30名）

〔会 計〕

(1) 平成19年度決算報告

(2) 平成19年度会計監査報告

大野信明監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成20年度事業計画

〔総 務〕

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間：平成20年5月6日(火)～5月17日(土)

(2) 「北海道野鳥だより」の発送（152号～155号）

(3) 新年講演会、野鳥写真映写会の開催

平成21年1月予定

(4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売（70部）

(5) 定例幹事会の開催（各月1回、計12回）

(6) 傷害保険の更新

〔広 報〕

(1) 「北海道野鳥だより」152号～155号の発行

(2) ホームページの維持・運営

〔探 鳥〕

(1) 探鳥会27回（宿泊探鳥会を含む）

〔会 計〕

(1) 平成20年度予算（案）

〔その他〕

(1) 健全会計および将来的な記念事業の開催等に備えて、積立基金特別会計を19年度に遡って設け、毎年適当額を積み立てていくこととした。

[役員人事]

会計幹事の蒲澤鉄太郎さんが総務幹事に、代わって総務幹事だった横山加奈子さんが会計幹事になった。また、総務幹事に新たに田中洋さん(札幌市北区)が加わり、探鳥幹事だった佐藤幸典さん(ご逝去)と広報幹事だった島田芳郎さん(道外に転勤)が退任した。

[平成20年度役員]

顧問 谷口 一芳、藤巻 裕蔵、井上 公雄
 会長 小堀 煌治
 副会長 戸津 高保
 監事 大野 信明、村野 紀雄
 会計幹事 清水 朋子、横山加奈子
 代表幹事 白澤 昌彦

幹事

(総務) ◎岩崎 孝博、大町 欽子、蒲澤鉄太郎、栗林 宏三、佐藤ひろみ、品川 睦生、田中 洋、中正 憲信、松原 寛直、横山加奈子

(探鳥) ◎中正 憲信、梅木 賢俊、門村 徳男、栗林 宏三、後藤 義民、佐藤ひろみ、竹内 強、富川 徹、成澤 里美、早坂 泰夫、松原 寛直、鷺田 善幸

(広報) ◎樋口 孝城、岩崎 孝博、北山 政人、白澤 昌彦、高橋 良直、武沢 和義、道場 優、戸津 高保、道川富美子、山下 茂

(◎印は各担当の代表者)

平成19年度 決算書

(収入の部)

項目	予算	決算	増減	備考
繰越金	549,503	549,503	0	
個人会費	640,000	516,000	▲124,000	
家族会費	90,000	112,000	22,000	前納、後納分等を含む
団体会費	10,000	15,000	5,000	
事業費	120,000	93,300	▲26,700	参加費、売上金ほか
寄付金	10,000	43,000	33,000	探鳥会支援謝礼ほか
雑収入	497	60,134	59,637	宿泊探鳥会剰余金ほか
合計	1,420,000	1,388,937	31,063	

(支出の部)

項目	予算	決算	増減	備考
印刷費	480,000	463,190	▲16,810	野鳥だより印刷費
通信費	170,000	132,370	▲37,630	野鳥だより郵送費ほか
会議費	40,000	47,050	7,050	幹事会、新年講演会会場費
消耗品費	80,000	9,689	▲70,311	文房具ほか
交通費	20,000	16,500	▲3,500	野鳥だより発送業務
報償費	55,000	55,000	0	事務所費用ほか
傷害保険費	25,000	25,000	0	
雑費	35,000	27,000	▲8,000	写真展費用ほか
予備費	515,000	0	▲515,000	
基金積立	0	200,000	200,000	積立基金特別会計へ繰入れ
合計	1,420,000	975,799	▲444,201	

1,388,937(収入) - 975,799(支出) = 413,138(次年度へ繰越)

平成20年度 予算書

(収入の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
繰越金	413,138	549,503	▲136,365	
個人会費	572,000	640,000	▲68,000	286名×2,000
家族会費	99,000	90,000	9,000	33家族×3,000
団体会費	10,000	10,000	0	2団体×5,000
事業費	84,000	120,000	▲36,000	参加費、売上金ほか
寄付金	9,000	10,000	▲1,000	
雑収入	12,862	497	12,365	
合計	1,200,000	1,420,000	▲220,000	

(支出の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
印刷費	480,000	480,000	0	野鳥だより印刷費
通信費	130,000	170,000	▲40,000	野鳥だより郵送費ほか
会議費	40,000	40,000	0	幹事会、新年講演会会場費
消耗品費	80,000	80,000	0	文房具ほか
交通費	20,000	20,000	0	野鳥だより発送業務
報償費	55,000	55,000	0	事務所費用ほか
傷害保険費	25,000	25,000	0	
雑費	30,000	35,000	▲5,000	写真展費用ほか
予備費	240,000	515,000	▲275,000	
基金積立	100,000	0	100,000	積立基金特別会計へ繰入れ
合計	1,200,000	1,420,000	▲220,000	

積立基金特別会計

(19年度収入決算)

項目	金額
一般会計から繰入れ	200,000
合計	200,000

(20年度収入予算)

項目	金額
繰越金	200,000
一般会計から繰入れ	100,000
合計	300,000

会員数

	16. 4. 1	17. 4. 1	18. 4. 1	19. 4. 1	20. 4. 1
個人	341	349	321	316	286
家族	38	40	34	32	33
団体	2	2	2	2	2



円山公園

2008. 3. 2

札幌市西区 古城 和子

いつもの日曜日より少し早目に起き、今朝は円山公園探鳥会に参加しました。三月に入り寒さもひと段落、お天気もまずまずそんな一日のスタートでした。

山登りを趣味として、ひたすら頂上をめざす登山にも年齢を感じつつ、花を見たり鳥を眺めゆっくり登る山も、鳥の名前が解つたらもっと楽しいのではと思い……参加しました。

まずはトビのお出迎え、次はヒガラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ等々。梅林では、ウソ、アカウソ、また初めて見るシメ。動物園近くでは、アカゲラ、ミソサザイ、キバシリ、次から次へと初めての鳥との対面。双眼鏡と野鳥の本を見ながら、親切かつ興味深い説明を聞きながらの楽しい二時間でした。機会があればまた参加したいと思いつつ帰路につきました。楽しいひと時をありがとうございました。

【記録された鳥】トビ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ツグミ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アトリ、カワラヒワ、ウソ、シメ、スズメ、ハシブトガラス、ドバト

以上20種

【参加者】阿部礼子、赤沼礼子、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、長船乙美、北山政人、栗林宏三、熊野美子、児玉 諭、笹森繁明、品川睦生、白澤昌彦・瑠美子、高田征男、高橋きよ子、高橋良直、武沢和義、田辺 至、戸津高保、中正憲信・弘子、成澤里美、畑 正輔、浜野チエ子、樋口孝城、平野規子、広木朋子、古城和子、辺見敦子、安真一郎、山田甚一、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、

以上36名

【担当幹事】武沢和義、中正憲信

ウトナイ湖

2008. 3. 23

【記録された鳥】カイツブリ、ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、キジバト、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ミヤマホオジロ、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上37種

【参加者】阿部真美、岩崎孝博、白田 正、長船乙美、蒲澤鉄太郎、北山政人、栗林宏三、後藤義民、齊藤修成、品川睦生、島田芳郎・陽子、高田征男、高野眞由美、高橋良直、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、成澤里美、浪田良三・典子、浜野チエ子、濱野由美子、本間卓也、本間裕美、松山健志、松山遼太郎、松原寛直・敏子、村上宏枝、柳川 巖、横山加奈子、吉田京子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸、渡辺 偕

以上39名

【担当幹事】栗林宏三、鷺田善幸

モエレ沼

2008. 4. 13 札幌市北区 田中 雅子

待望の春！新年度がスタートしました。愛護会の探鳥会、平成20年度モエレ沼からのスタートです。どんな鳥に出会えるかとウキウキ、ワクワクです。前日の寒さと打って変わって暖かい日差しの中、進級した学生のように気持ち新たに参加した探鳥会、昨年を上回る50名以上の参加者でした。初めて参加された方もおられ、幹事さんの肌理細やかな説明で大船に乗った気分で歩き始める事ができました。やはり、愛護会の方々は優しく、暖かくいつも癒されております。

いきなり、“対岸にアカゲラ”という声に必死に双眼鏡を覗いていたのですが発見できず、スコープに入れて頂き確認。あんなに遠くのアカゲラをすぐに見つけられる素晴らしい目にいつもながら感嘆してしまいました。“だって目の前から飛んで行ったんだよー”とおっしゃっていましたが、追っていきける目が素晴らしいのです。そうですね！

水鳥の数も多く、ヨシガモ、ヒドリガモ、カワアイサ、ミコアイサ、マガモ、カルガモ、オオバン、このあたりは何となくわかるようになって来たと思うのですが。“アメリカヒドリみたいのがいるよー”の声に、“アメリカヒドリ？”“どんな鳥？どんな色？見たことのない鳥を双眼鏡でさがしてみるのですが見つけられず、またまた、スコープに入れて頂いた姿で確認。頭の部分が少し違うような…うーん難しい！（なお、その鳥はアメリカヒドリとは断定できず、ヒドリガモとの雑種かもしれないということでした。）

そうそう何事も予習、復習が大事と息子の高校の入学式で先生が言ってましたっけ。図鑑を見て予習をし探鳥会に参加、終わったらまた図鑑で確認してと心に命じているのですが…頑張るぞー！

岸辺にオオジュリン1羽のオスが4羽のメスを引き連れていたのを見て“うらやましいなー”とつぶやいていた聞きなれた声に“あらー、1人ではご不満？”と思いつつ聞き流し、私は別のつがいのオオジュリンを見つめていました。オスの頭はまだ黒くなりきっていないのネー かわいいなー 若いって素晴らしい!! あれ？若いのではなく、春だからでしょうか？こうしたちょっとした疑問を今年は知識に変えて行かねば!!

偶然宮島沼でお会いした愛護会の方々のやさしさと魅力

に引かれ、ご一緒したらきっと楽しいに違いないという直感でその場で入会しましてから、3年半の月日が経ちました。探鳥会デビューの時は一緒だった息子は残念ながら親より友情を取り、その後参加拒否ですが、私達夫婦の少し興奮気味の話は耳に入っているらしく、学校で作成したお皿の絵はどう見てもオオルリのように多少なりとも影響は与えているようであります。よしよし。

今年4度目の春、年を重ねる事で気づく事があります。昨年はシメのくちばしが繁殖期は鉛色になっているという事に気づきました。硬いくちばしがピンク色からどの様に鉛色に変化するの不思議であり興味深くもあり、鳥の子孫繁栄に注ぐ力の凄さを感じました。

春は沢山の野鳥に出会える時であり、今年はどんな変化に気づく事が出来るのかしら、またどんな鳥に出会えるのかしらとまだ見ぬ野鳥を想い毎週末を心待ちにしています。また、愛護会の皆様と楽しい時間を共有させて頂けることに感謝しております。まだまだ駆け出しの私ですが、これからもどうぞよろしく願いいたします。

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、キジバト、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ヒガラ、ミヤマホオジロ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上29種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、荒木享子、板田孝弘、伊藤喜多子、井上公雄、今泉秀吉、今村三枝子、岩崎孝博、牛込直人、河野美智子、蔵前 徹、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、小林 進、坂井伍一・俊子、品川睦生、清水朋子、白澤昌彦、高田征男、高橋良直、竹田芳範、田中志司子、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、道場 優、富樫啓一、徳田恵美、戸津高保、中正憲信・弘子、浪田良三、成澤里美、信田洋子、浜野チエ子、濱野由美子、原美保、樋口孝城・陽子、平野規子、広木朋子、松原寛直・敏子、道川富美子、山本和昭、山本昌子、吉中宏太郎・久子、横山加奈子、吉田慶子、渡辺 偕、渡辺吉宗・好子

以上58名

【担当幹事】樋口孝城、栗林宏三

宮 島 沼

2008. 4. 20

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、ハイタカ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、コガモ、カルガモ、オナガガモ、キジバト、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス

以上24種

【参加者】阿部真美、板田孝弘、岩崎孝博、川東保憲・知子、北山政人、蔵前 徹、栗林宏三、坂井伍一・俊子、品

川陸生、清水朋子、高橋良直、田中 洋・雅子、田辺 至、徳田恵美、長尾保秀、長尾由美子、中正憲信・弘子、成澤里美、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫・みどり、原 美保、平野規子、広木朋子、松原寛直、松山 潤、安 真一郎、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子

以上35名

【担当幹事】岩崎孝博、中正憲信

野 幌 森 林 公 園

2008. 4. 27 札幌市南区 西尾 京子

初めて参加した探鳥会は、まるで大学の授業に出た幼稚園児の様なものでした。普段は庭や水鳥公園などで、その美しい色彩の取り合わせに感心しながらのんびり双眼鏡で楽しんでいる私ですので、鳴き声を頼りに瞬時にその姿をキャッチする皆様の技に驚かされました。今回も多く的小鸟がいたようですが、私に理解できたのはアオジとアカゲラだけ。それでも勿論大満足でした。

私が探鳥を始めたのは最近です。きっかけはインターネットで見た大きくアップされた鳥の写真でした。そのつぶらな瞳と仕草に表情がありました。「綺麗～」としか思っていなかった鳥にも表情や感情があるという事に、今更ながら思いが至りました。それから写真をよく見るようになり、そして本物に会いたくなりました。

しかし、鳥たちの生態の複雑さにびっくりしています。簡単では無い分、生きていく環境も厳しいのでしょう。鳥がそこにいるのを感じても「姿を見たい」「名前を知りたい」と言う素朴な希望はなかなか叶いません。それなのに「北海道に行けばクマゲラに会える、ヤマセミに会える」と簡単に思い込んで来てしまいました。今思えば希望と期待で目が眩んでいたのだと笑ってしまいます。クマゲラにはまだ会えていませんが、居たことを想像出来る所には行きました。ヤマセミは魚を食べる所も飛ぶ所も見ることが出来ました。可愛いエゾリスにも会えました。

刻々と大きくなる若葉や花に急がされる思いがして、頻繁に出掛けて目や耳を澄ましています。豊かな自然からの美しい贈り物にも沢山出会って、一人で見るのが勿体ないようです。

ウォッチングガイドだけを見て、何も分からないまま参加したのに良くして下さり本当に有難うございました。北海道に来たばかりで夢見心地のまま、感想文を受けてしまいました。こんな立派な会報に載るとも知らずに！のうっかり者をお許し下さい。今後も貴団体のますますのご発展を願っております。

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、ハイタカ、オシドリ、マガモ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ルリビタキ、ノビタキ、ウグイス、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、シメ、ニューナイスズメ、カケス、ハシブトガラス

以上30種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、牛込直人、大島 武、

岡田弘毅、後藤義民、小西峰夫・美美枝、坂井伍一・俊子、品川睦生、高田征男、徳田恵美、中正憲信・弘子、西尾京子、蓮井 肇、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子

以上25名

【担当幹事】後藤義民、中正憲信

藤 の 沢

2008. 5. 6

札幌市北区 数田 直之 (11才)

私にとっては久しぶりの探鳥会なのに天気予報は雨・曇りとあまり良くなく心配していましたが、朝には天気も晴れ、予報でも晴れになりました。

集合場所の“白鳥園”に着くともうたくさんの方が集まっています、もういつでも出発できそうになっていました。私たちの準備が済むとみんなすぐ出発しました。歩くのが遅い私となりで幹事の方がいっしょに歩いてくれて、とても親切にしてくれました。今回のコースはすこし丘になっていて、歩き始めて少しの間はヤブサメ、ウグイス、ヒヨドリ、センダイムシクイなどの声が聞こえるだけで姿は見ることができなくて少し残念でした。

でもしばらく歩くと隣を歩いていた幹事の方が立ち止まって、私にハシブトガラが巣を作っているところを見せてくれました。私は見た事がなかったのでもとてもすごいなと思いました。キツツキの開けた穴を巣にしているのだそうでした。しばらく感動して見ていたせいで、他の人からすいぶん離れてしまいました。

その後は、他の人に追いつくまでの間急ぎ足で歩いていて周りをあまり見なかったせいか、あまりたくさん鳥を見ることはできず、寂しいような気がしていました。でもタチツボスミレ、オオタチツボスミレ、ヒトリシズカ、エゾエンゴサクなどたくさんの花があり楽しい気分にもなりました。頂上から下りるときも同じで、鳥の姿を見ることができませんでした。

ところが意外な事に森を出ると少しはなれたところにツグミなどの鳥を見る事ができ、とてもよかったです。

今回の探鳥会ではあまり鳥の姿を見る機会がありませんでした。でも鳥が巣を作っているところなどを見ることができて、充実していたような気がします。

【記録された鳥】

トビ、マガモ、アカゲラ、キジバト、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、アカハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、エナガ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上27種

【参加者】板田孝弘、白田 正、数田 聡・真弓・直之・春菜、蔵前 徹、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、斎藤昌子、清水朋子、高橋きよ子、竹田芳範、塚崎航太、辻 雅司・方子、戸津高保・以知子、鍋島美代子、成澤里美、西

尾京子、蓮井 肇、蓮井あかね、畑 正輔、松原寛直・敏子、村上茂夫 矢嶋一昭、吉中宏太郎、横山加奈子
以上31名

【担当幹事】小堀煌治、栗林宏三

十勝管内 (宿泊探鳥会)

2008. 5. 10~11

札幌市北区 成澤 里美

大通の道新前6:30、出発直前に色鮮やかなイスカの群れが出現。暫く観察してから出発。まずは幸先のよいスタートだ。

最初の探鳥地は清水町剣山登山口で大自然霊光院なる寺院周辺。山は雪を戴き、冬が戻ったような寒さ。オオジシギがディスプレイフライトで出迎える。広場にはアカハラやクロツグミの似たもの雄雌。比較ができて識別練習になる。ブルーが鮮やかなルリビタキ雄が往来する。小川ではカワガラスも出た。駐車場で黄色い嘴のイカルが上から見下ろしている。寒かった割に多くの野鳥が見られたのは、前日の荒天で山間の鳥たちが降りてきたせいかも。

昼食後は豊頃町勇洞沼へ向かう。ここは細い砂州で海と隔てられた潟湖だ。浅い湖面にタンチョウが立っている。海側ではクロガモ・ウミアイサなどが波間に浮き沈みしている。アビも何羽か見られた。頭部と同じくらい太い首をやや前に突き出し、尾羽も水没して低い姿勢だ。すぐに潜ってしまうが、背面グレーで前頸暗赤紫色の夏羽個体が美しい。

次は潮が良い状態なのでシギ・チドリの観察ポイント十勝太を目指す。浦幌十勝川河口部に接続する遊水池のようだ。2羽のタンチョウが見られた。キアシシギが多く30羽くらいいそう。スマートなセイタカシギの姿が印象的だ。チュウシャクシギなども混ざる。コガモなどカモ類も多く、オジロワシが飛来するや一斉に飛立ち、反転する様はみごとだ。1日目の探鳥を堪能して今夜の暁、豊頃町茂岩・十勝ロイヤルホテルへと向かう。鳥合わせの後、宴会。その後、二次会。野鳥談義に花が咲き、鳥仲間の共感深まるひと時だ。

2日目の早朝探鳥。ホテル周辺は高台の自然公園。オオバナノエンレイソウ群落が見事だ。早朝の冷気が心地よい。オオルリ・キビタキも出る。満開の桜の枝でニューナイズメが花蜜を吸うのに夢中だ。上空ではオオジシギが4羽ほどブルーインパルスよろしく飛び交う。出発前にご案内して下さる浦幌野鳥の会の方から当地の情報を伺い期待が高まる。

豊頃町幌岡へ向かう道路沿いの農地でタンチョウが2羽採餌していた。茶色味が残る幼鳥だ。畑に散布された堆肥に混じるトウモロコシを食べるのだそう。その後、下車して歩く堤防前方の水路に一組のタンチョウ家族。ヒナは黄色い幼綿羽の可愛らしいおチビさん。孵化して1週間くらいとのこと。母親の後ろについて見え隠れしながら河畔林へと姿を消した。父親は観察者たちの目を引き付けるように反対側へと移動する。タンチョウは増えて、生息域を

広げていることをここで実感できた。だが繁殖条件の良い土地は少ないらしい。

最後の探鳥地は幕別町、十勝川の千代田新水路。普段は水位が低く保たれている。それがシギ・チドリ好みなのだから。ゆっくり走行するバスから待望の夏羽エリマキシギが見えた。車窓観察の後、刺激しないよう静かに下車して道路から見る。羽衣に大きな黒斑を散りばめ嘴や足もオレンジの美形だった。黒い夏羽のツルシギと隈取のキョウジョシギも見られ、水辺は春の装いで賑っていた。

自然の微妙さにはいつも心を動かされるが楽しい時間は短い。帰りの車中では命輝く十勝の野鳥たちの姿を反芻していた。案内してくださった浦幌野鳥の会の方々、ホテルの皆さん、750kmを安全に運転してくれたドライバーさん、企画実施に当たった幹事の皆さん本当に有難うございました。

【記録された鳥 5.10】

(清水町剣山登山口・豊頃町湧洞沼・浦幌町十勝太など)
アビ、ウミウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ノスリ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、クロガモ、ピロードキンクロ、ウミアイサ、カワアイサ、タンチョウ、チュウシャクシギ、ソリハシシギ、キアシシギ、オオジシギ、セイタカシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、キジバト、アカゲラ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、ルリビタキ、ノビタキ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、ニュウナイズメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト
以上60種

【記録された鳥 5.11】

(豊頃町茂岩・豊頃町幌岡・幕別町十勝川など)
アオサギ、トビ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガ

モ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カワアイサ、タンチョウ、コチドリ、ツルシギ、タカブシギ、キアシシギ、キョウジョシギ、オオジシギ、エリマキシギ、オオセグロカモメ、キジバト、ツツドリ、アカゲラ、コゲラ、ヒバリ、ツバメsp.、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ツグミ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、ニュウナイズメ、スズメ、ハシボソガラス、ドバト

以上55種

【参加者】赤沼礼子、石橋和子、板田孝弘、岩崎孝博、岡部良雄・美冬、河野美智子、蒲澤鉄太郎、川東保憲・知子、栗林宏三、小西峰夫・芙美枝、小堀煌治、品川陸生、清水朋子、白澤昌彦、高橋良直、田中志司子、道場信子、徳田恵美、徳田和美、戸津高保・以知子、長尾保秀・由美子、中嶋慶子、成澤里美、橋爪陽子、畑 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、早坂泰夫・みどり、原 美保、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、中正憲倍・弘子、山本昌子、横山加奈子、吉中久子、渡辺栄子

以上45名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、清水朋子、高橋良直、栗林宏三、戸津高保

野幌森林公園

2008. 5.17

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、キジバト、アオバト、ツツドリ、ハリオアマツバメ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、コルリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブ



宿泊探鳥会集合写真 2008. 5.11 豊頃町

トガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、スズメ、ハシブトガラス

以上31種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、井上公雄、今村三枝子、牛込直人、宇山、大坂博記、大森アヤ子、川村、久世 進、後藤義民、小西峰夫、品川睦生、高田征男、田川 実・ひ

ろ子、竹田芳範、田中 洋・雅子、戸津高保、友成 功・弘江、永井敏子、中正憲信、中島けい子、成澤里美、野坂英三、蓮井 肇、畑 正輔、濱野由美子、原 俊郎・京子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、村上茂夫、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子

以上39名

【担当幹事】後藤義民、松原寛直

【福 移】 2008年7月6日(日)

福移小中学校前から石狩川堤防に上がる道の左右は畑地・牧草地で、ノビタキ、オオジュリン、ホオアカなどが見られます。札幌周辺ではあまり聞かれなくなったといわれるカッコウの声も、ここでは良く聞かれます。堤防道路を石狩川上流に向かって1kmほど行くと石狩川と豊平川の合流点です。川面や河川敷牧草地にはショウドウツバメが飛び交い、コヨシキリが賑やかに囀っています。運が良ければカワセミのダイビングが見られるかもしれません。ノゴマの美声も期待できます。この時期は繁殖も後半期となり、巣立ってから間もないノビタキなどの幼鳥が見られることもあります。河川敷外側にある墓地周辺を見た後は同じコースを戻り、学校前庭で鳥合わせ、昼食となります。

集 合：福移小中学校前 午前9時

交 通：地下鉄環状通東駅発、中央バス北札苗線
「福移小学校通」下車、徒歩5分

【野幌森林公園】 2008年7月13日(日)・9月7日(日)

初夏と初秋の野幌森林公園を楽しみます。7月と9月とではそれぞれ異なる趣きがあります。7月は緑がいっぱいです。鳥たちは繁殖をそろそろ終え、少し静かになりますが、キバタキやオオルリの声もまだ聞こえることがあります。カラ類などの馴染みの鳥たちも忙しく飛び回っています。9月は夏鳥たちがほとんどいなくなり、ちょっと寂しくなっています。見られるのは大部分が留鳥ですが、初秋の森林でカラ類などをじっくりと見るのも一興です。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通：JR新札幌駅発、夕鉄バス「大沢公園入口」下車、JRバス「文京台南町」下車 徒歩各6分

【石狩川河口】 2008年8月17日(日)、9月28日(日)

秋の渡りシーズンの前半と後半に石狩浜・河口で主にシギ・チドリ類を楽しみます。はまなすの丘公園ビジターセンターの前から浜に出て、河口まで1.6kmほど歩きます。

シロチドリ、メダイチドリ、トウネン、ハマシギ、ミユビシギなどが見られます。ユリカモメやアジサシの群れにも会えるかもしれません。河口からは石狩川に沿って戻ります。夏、秋のはまなすの丘公園の植物も楽しめます。全部で4km弱の行程になります。石狩浜や石狩河口でのシギ・チドリ類との出会いは運次第といったところがありますから、もしかしたら多くを見られないかもしれません。でも、海を見ながら砂浜を歩くのはメタボ解消に少しは役立ちます。駐車場に戻ってから鳥合わせをし、センター内などで自由に昼食をとることになります。

集 合：ビジターセンター駐車場 午前9時30分

交 通：札幌駅発中央バス7番石狩行
終点「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】 2008年8月31日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリ類の観察が主目的です。シギ・チドリ類には当たりはずれがあります。近年ははずれが多い状態でした。でも昨年の5月の探鳥会では、春の渡りの時期ではありましたが、トウネン1000羽超、それ以外にもチュウシャクシギ18羽など大当たりでした。さて、その再現はなるでしょうか。シギ・チドリ類以外にもカモメ類が楽しめますし、河口周辺の草原では冬羽に衣替えしたノビタキやオオジュリンなども見られます。上空をチュウヒやオオタカ、そして、ミサゴが飛ぶことも希ではありません。当日の天候次第ですが、人工干潟付近で鳥合わせをし、自由解散となります。

集 合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時30分

交 通：札幌駅または地下鉄大谷地駅発、道南バス浦河行（ペガサス号）、「四季の館」前下車

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆昼食、雨具、筆記用具をお持ち下さい。

☆問い合わせ

北海道自然保護協会 011-251-5465

午前10時～午後4時（土・日祭日を除く）

探鳥幹事・佐藤幸典さんを悼む

札幌市白石区 山田 良造

4月11日の午後1時半過ぎ、野鳥写真仲間の一人から電話があり、佐藤幸典さんが入院先の北榆病院（札幌市白石区東札幌）で亡くなったとの知らせを受けました。信じられない思いでした。

佐藤さんは江別市にある酪農学園大学を卒業してからは会社勤めで岩見沢在住でした。私は旭川市だったのですが、岩見沢に転勤になり、1983年頃、発足したばかりの岩見沢野鳥の会の行事で佐藤さんと知り合いになりました。その後私は定年となり札幌に住むようになったのですが、佐藤さんとはよく一緒に珍しい鳥を撮影するために、根室市（ナキイスカ）、斜里町（クビワキンクロ）、帯広市（ナキハクチョウ）などに出かけたものでした。

佐藤さんは温厚な誰からも好かれるタイプで、すばらしいものがあつたと思います。長らく愛護会の探鳥幹事として活躍しておられました。また、宮島沼や鶴川河口などの情報に詳しく、それを基にしたアドバイスを私もたくさんいただきました。「野鳥だより」の表紙では、コシアカツバメ（第75号、1989）、ケイマフリ（第90号、1992）を発表し、記事には「マナヅルの観察記録」（第124号、2001）などがあります。

佐藤さんは定年の少し前に勤めを辞め、野鳥だけではなく、昆虫や花など自然の写真を撮影することにいそしんでおられました。未だ満62歳の若さでした。近く、花と野鳥の本を出すことを計画していると聞いていました。本当に惜しい人を失い、残念でたまりません。会員の皆様と共に心からご冥福をお祈りいたします。

鳥民だより

◆平成20年度野鳥写真展出品者・作品◆

荒木 良一	ハイイロチュウヒ、カワガラス
稲村 勇一	カワセミ、キセキレイ
小堀 煌治	クマタカ、ハチジョウツグミ
品川 睦生	アオバト、ホシムクドリとムクドリ
新城 久	ハイイロチュウヒ、クロツラヘラサギ
高橋 良直	ミサゴ、トウネン
田中 洋	クマゲラ、キビタキ
田向 一彦	エゾフクロウ 2点
中正 憲佳	チョウゲンボウ、コオリガモ
早坂 泰夫	キビタキ、ウミガラス
宮崎 嵩司	ツツドリ、セイタカシギ
山田 甚一	ベニヒワ、イスカ

山田 良造 クマゲラ、オオルリ
吉中宏太郎 タイナ

以上 14名 27点

◆記事の訂正◆

ここ1年間に発行された「野鳥だより」、および平成20年度探鳥会予定表の中に以下の誤りがありました。お詫びして訂正致します。

- ・第148号（2007年6月）の11ページ、平成19年度総会報告中の平成19年度予算書、収入の部の増減欄
(誤) 135,000→(正) 20,000
- ・第149号（2007年9月）の表紙、撮影日
(誤) 2006. 4. 22→(正) 2007. 4. 22
- ・第151号（2008年3月）の2ページ、写真説明
(誤) ノジコ雄成長→(正) ノジコ雄成鳥
- ・同上の3ページ、写真説明中の年月日
(誤) 2006. 4. 30→(正) 2005. 4. 30
- ・年間探鳥会予定表、5月25日の鶴川河口の交通機関など
(誤) 大谷地発→(正) 地下鉄大谷地駅発
- ・同上、8月31日の鶴川河口の集合時刻
(誤) 午前9時→(正) 午前9時30分

◆「野鳥だより」発送方式の変更◆

これまでは郵便でしたが、今号からは宅配便を利用することになりました。送料をだいぶ節約できますが、送付住所変更の場合には速やかに連絡していただく必要があります。よろしくお祈りいたします。

【新しく会員になられた方々】

青柳雅信・郁子 千歳市
伊藤裕美 札幌市北区
蓮井 肇 江別市大麻

小堀煌治会長 野鳥写真展

場 所 中山峠写真の森美術館（道の駅望洋中山の隣り）
展示期間 7月13日(日)～9月30日(火)
開館時間 9：00～17：00（夏季間は休館日なし）

デジタル全盛時代を迎え、自分もデジタルに変えてはみましたが、どうもしっくりしません。一区切りの意味で今までの写真を展示することになりました。不慣れな場所ですが、中山峠を通った時にご笑覧下さい。

（会長談）

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>